

氏 名	松 野 ま い
氏 名	MATSUNO, Mai
学 位 の 種 類	博 士 (学術)
学 位 記 番 号	甲 第 1 9 7 号
学 位 授 与 年 月 日	2 0 1 7 年 6 月 3 0 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	Complex Journeys behind the Curriculum Vitae: Six Japanese University English Teachers' Reflections on Their Writing and Research Experiences 経歴書の向こうに見える複雑な旅路 —日本人大学英語教員六人が振り返る執筆・研究経験—
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 富 山 真 知 子 副 査 教 授 ジョン C. マーハ 副 査 教 授 森 島 泰 則

論文内容の要旨

本研究は、6名の博士号を持つ日本人大学英語教員の、キャリアの過程における執筆・研究経験を、現職に従事する以前の歩みとともに明らかにするものである。6名は現在、異なる日本の大学に専任で勤務する中堅の教授で、いずれも同世代であり、本研究実施時点で四十代前半であった。最初に英語に触れた時期は様々ながら、全員日本の大学で学部時代を過ごした。また、3名が日本で、残りの三名が米国で博士教育を受けている。

研究アプローチとしてはナラティブ・インクワイアリー (Connelly & Clandinin, 1990; Clandinin & Connelly, 2000) を採用し、各々の教員との2回、あるいは3回にわたる深層インタビュー、および1回のメンバーチェック・インタビューを主要データとして用いた。また、本人による伝記的調査票への回答や、公刊・非公刊の著作といったテキストも補足データとして参照した。さらに、語られた経験に見られる共通した、あるいは個々に相違した特徴を記述し、探求するために、リストーリーリング・アプローチ (Clandinin & Connelly, 2000; Ollerenshaw & Creswell, 2002) とクロス・ナラティブ分析を使用した。

参加者の大学教員になる以前についてのストーリーでは、特に日本の大学改革前・あるいは改革黎明期を背景としての、各々に特有の言語、リテラシー、そしてティーチングに関連したバックグラウンドが浮き彫りになった。また、博士課程への進学へとつながる、自身の学習ニ

ーズの進化に積極的に対応する、エージェンティックな努力も共通して明らかになった。一方、インタビューの中心であった執筆・経験についてのストーリーでは、いずれの参加者も、個人史を背景にしつつ非線形的で複雑な旅路を構築した。ここで語られたのは、研究を通しての知識構築を規範とするアカデミアの世界と、研究はあくまで「少数派の活動」(Borg, 2010, p. 391)であるとされる英語教師の世界との間を不断に行き来するさまである。

アカデミック・キャリアの初期においては、学究経歴を問わず、すべての参加者が積極的に英語での博士論文やその他の出版活動に取り組んでいたことがわかった。日本で博士教育を受けた教員は博士の初期の段階からティーチングと研究に同時に取り組んでいたことから、言語やジャンルにこだわらない効率的な研究生産を重視していた。一方、アメリカで博士教育を受けた教員は、一定期間集中した研究生活を送っており、研究生産における知的プロセスを重視し、英語での、主に研究論文という形での発表を中心としていた。総じて、参加者がこの時期に取り入れた各々の執筆・研究プラクティスは、現在のプラクティスの基礎となっているように見受けられた。一方、大半の参加者が、この時期に貴重な職業経験の機会を得ながらも、高等教育における管理主義の高まりの影響下で、不安定かつ労働負荷の高い業務条件を経験していた。

参加者の現在のキャリアステージについてのストーリーでは、さらなる大学改革や管理主義の強化という時代的文脈のなかで、自身の勤務する大学において英語教育に貢献するという個人的な情熱と組織的な使命感が表現されていた。しかしながら、全員が——私立大学で専任を務める教員、中でも米国で博士教育を受けた教員は特に——その知識構築能力にもかかわらず、望むようなかたちで研究を続けることに難しさを感じているようであった。参加者は現在、既存の文献で描かれているノンネイティブの英語教員の多くと比べれば、自らを研究者として見ることのできる条件 (Xu, 2014) に恵まれているが、個人的、組織的、ネットワーク的な制約のために、研究者であること、および研究者になることに対する葛藤を示した。一方こうした制約のなかで、研究を続ける意志もまたそこにあった。

これらの知見は、ノンネイティブの大学英語教員が抱える、キャリアをめぐる問題、ライティングによる学問分野への文化適応をめぐる問題、職業環境における研究活動をめぐる問題が相互に関連しており、より包括的に検討されるべきであることを示唆している。本研究は、最後に、上記の知見と関連する文献に鑑み、そしてアカデミアにおける研究環境に対する悲観的な観測を考慮し、そうした教員に対して、キャリア全体を通じての執筆・研究の訓練、サポート、メンタリングのみならず、起業訓練も含めた持続的なキャリア教育とガイダンスを提供すべきであることを主張する。

論文審査結果の要旨

英語教育に関する研究領域は、第二言語習得理論、教授法、教員養成等々多岐にわたるが、教員自身の履歴や執筆、研究活動及び職業環境に関する研究は大変マイナーな領域と言わざるを得ない。ましてや高等教育に従事する非英語母語話者英語教員を対象とした非英語母語話者英語教員による研究となると、審査委員の知る限りでは皆無と言える。また、実際の教育現場における英語教員の生活の実態を記述したものは散見されるが、日本の大学英語教員の執筆活動や研究活動、そして彼らを取り巻く環境の実態を表したものの皆無ではなかろうか。そうした中、松野氏の本博士論文研究は、新たな領域を開き、新たなテーマに注目したという点において大変意義深いものである。

新たな研究領域やテーマに取り組もうとする際には、いわゆる暗中模索の状態においては、質的研究が特に有効である。言語教育における質的研究の認知度は近年になってようやく高まりつつあるが、それでも量的研究のみを「科学的」と考える研究者が未だに存在するのが実情だ。それも踏まえ、松野氏は、まずは質的パラダイムの正当性を綿密に説き、本研究の本体論的、認識論的、価値論的前提を提示している。

本研究は、質的研究の中でも、ナラティブ・インクワイヤリーの手法を採用し、6名にも及ぶ若手大学英語教員から得た（主に）深層インタビューによる膨大なデータに基づいてその実態を明らかにしたのだが、質的研究においては、6名というのは異例の多さと思われる。それに伴うデータの書き起こしをはじめとして、分析、「メンバーチェック」等にかかる膨大な時間と手間を考えると、松野氏の忍耐力、持続力、そして研究目標達成への不屈の精神も大いに評価したい。質的研究はこのような「研究力」なしには成果が得られない。

また、松野氏の筆力に関しても、高い評価を与えたい。松野氏は最終的にリストーリングという形で、得られたデータを解釈及び提示しているわけであるが、個々人のストーリーを研究者自身が、分析結果に基づき、一定の枠組みを持って、対象者に代わり物

語るこの手法は、分析力のみならず、相当な筆力を要する。質的研究の成果は筆力によって決定すると言っても過言ではないと思われるが、本研究の成功の要因のひとつは松野氏の筆力にあったと考える。

厳密な質的研究に必要とされる条件は多々ある。例えば、研究者の立ち位置を明らかにすること。松野氏はこの点においても、自身が異色の経歴を持つ大学の英語教員であることなどを過去の履歴や心情、信条を含め、6名の参加者の記述に匹敵するほどの綿密さで明らかにしている。また例えば、妥当性を検証すること。質的研究においては、もちろん量的研究のような妥当性の検証手法は取れないが、本研究では「厚い記述」や「メンバーチェック」により、その妥当性が担保されている。その他、松野氏は細心の注意を払って、厳密な手続きに従い、本研究を厳密な質的研究論文として成立させている。

松野氏はまた、対象者の現在の執筆・研究活動及び職場環境のみならず、そこに至る過去の履歴も丁寧に追っている。論文のタイトルにもなっているように、現在に至る道筋を綿密に辿ることによって、現在が浮き彫りになるわけで、質的研究の表現には3次元描写が必要とされるが、松野氏はまさにそれを実践したと言える。

6名を対象者とすることは、膨大なデータを解釈・分析することになり、困難を極めることは上に述べた通りだが、6名を対象としたことで、対象者のデータの比較対照をすることができたわけで、アメリカで博士教育を受けた者と日本で博士教育を受けた者との差異が明らかになったのも貴重な知見である。

質的に得られた解釈・分析結果のすべてをここに評価することはできないが、まとめれば、松野氏の本研究は、今まで全く陽の当たらなかった領域を、マイナーな質的研究手法によって、しかも厳密な手続きを踏んだ質的研究手法によって、関連領域研究者の関心を集めるであろう成果を出したと評価する。

博士学位論文審査は、2017年5月1日午後3時10分より4時20分まで、国際基督教大学第2研究棟201号室において行われた。初めに、松野氏による20分間の

公開口頭発表が行われ、続いて10分間の聴衆との質疑応答が行われた。公開発表の後、松野氏と審査委員のみによる口頭試問が行われ、最後に審査員による審査委員会が開催された。その結果、委員全員の一致を得て、本論文が国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科における博士（学術）の学位を授与するに値するものと認めた。